巻頭言

人間看護学部　学部長
糸島陽子（いとじまようこ）

看護は実践の科学と言われているように、根拠に基づいた実践が求められている。

表面的な現象だけにとらわれず、本質を見抜き看護を提供するためには、看護研究は切り離せない。

フローレンス・ナイチンゲールは、「看護はひとつの芸術（an art）であり、それは実際的かつ科学的な系統だった訓練を必要とする芸術である（ナイチンゲール著作集第2巻）」と述べている。この芸術（an art）となる部分は、看護師によって創られた実践的な技術で、この創造性をどのように豊かにしていくのかが看護を発展させていく鍵でもある。実践の中から生じた疑問を研究の問いとして取り上げ、その問いを解決するためにあらゆる方法を模索し、調査をとおして得られた結果をさらに現場へ還元するサイクルは、看護の学問体系を強化することにつながる。

しかし、昨今の社会状勢の中、看護を提供する場は大きく変化している。看護研究も同様で、調査する難しさに直面した人も少なくないはずである。コロナ禍前のような調査はまだできないかもしれないが、看護現象を言語化する努力は続けていきたい。その取り組みの1つとして、『人間看護学研究』を少しでも皆様方に活用していただければと願う。

2023年は卯年で、いろいろな困難な場面に遭遇したとしても、その身のこなしで大きく成長できる年とされている。看護実践の場も研究活動の場も、うさぎのように飛躍の年になることを期待したい。